Theatre Report

©小熊栄

芸劇dance

「無限大∞パイプオルガンの宇宙―バッハから現代を超えて」

'13年4月12日［金］東京芸術劇場 コンサートホール

構成・演出・振付・照明：勅使川原三郎
出演：勅使川原三郎／佐東利穂子／ジイフ／鰐川枝里／加藤梨花
オルガン：鈴木優人

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

オルガンの可能性に大きな期待―Dance×Organ公演レポート

4月12日、ダンサーの勅使川原三郎とオルガニストの鈴木優人のコラボレーションによる『無限大∞パイプオルガンの宇宙ーバッハから現代を超えて』を観た×聴いた。劇場の改修後、オルガンを聴くのは初めて。さらに、2012年シアターXでの「オルガンー呼吸する物理学」で本物のリードオルガンを舞台に登場させた勅使川原と、作曲・プロデュースにも才能を見せる俊英・鈴木の顔合わせとあって、何ヶ月も前から楽しみにしていた。

芸術劇場のガルニエ・オルガンは、モダン面とバロック面、2つの顔をもつ。ステージは、モダン・オルガンを使った即興から始まった。オルガニストが足を思い切り左に伸ばすと、ババババ……と、楽音には聞こえない低周波の振動が伝わってくる。このオルガンの中で一番大きい、高さ10メートル近くあるパイプの音色だ。そこに、ほとんど耳鳴りのようなキーンという高音が重なる。これは、一番小さいパイプの音。そう来たか、と、早くもワクワクしてくる。即興の音が消えて暗転、舞台でダンサーが鋭い音でタップを踏む中、いつの間にかオルガンが回転してバロック面に。かなり速いテンポでJ. S. バッハの「パッサカリアとフーガ」が始まると、佐東利穂子、ついで勅使川原が登場――最初から、オルガンとダンスがぴったりと呼応した巧みな演出に目を奪われた。

鈴木は、バロック・オルガンでバッハ、ルネッサンス・オルガンでスウェーリンクとブクスフーデ、そして再び回転してモダン・オルガンでメシアンと、楽器のスペックをフルに生かして古今オルガン音楽のエッセンスを披露した。メシアンに移るときは、客席中が息を詰めて見守る中、オルガンが粛々と回転。勅使川原は「音楽の友」誌に、オルガンが動く様は「古典建築と宇宙怪獣が交差するような異空間的ダイナミズムが視覚化され劇的」と語っている。生命あるもののように息づくオルガンの巨大な存在感が、勅使川原に強いインスピレーションを与えたことがよくわかった。オルガンが生み出す空気の波動に感応し、無限にうねる勅使川原と佐東の身体によって、絡み合う音の宇宙が舞台上に現出する。聴き慣れたオルガン作品を目で見る、それは実に刺激的な体験だった。

緻密に作り込まれた演出から察するに、今回はダンス主導で段取りが決まっていたものと思われる。オルガンが舞台上高くに位置していることもあり、ダンサーとオルガニストは直接アイ・コンタクトが取れる位置関係にはない。もう少しライブ感があればと思わないでもなかった。オルガニストは、今日でも即興を日常的に行っている（教会の礼拝の進行に合わせるため）。お互いが見えるところで、たとえば全編即興で「異種セッション」をしてもおもしろいのではないか。今回のようなコラボレーションを重ねる中で、新たに生まれてくるものもあるだろう。演劇・ダンスの制作能力が高い東京芸術劇場だからこそできる試みに、これからも期待したい。

文：中村ひろ子（ライター・翻訳者）

© Goro Tamura

©引地信彦

「マシーン日記」

'13年3月14日［木］～31日［日］ 東京芸術劇場 シアターイースト
'13年4月13日［土］ りゅーとぴあ（新潟）
'13年4月20日［土］～21日［日］ 北九州芸術劇場（福岡）
'13年4月25日［木］～27日［土］ パリ日本文化会館（フランス）

作・演出：松尾スズキ
出演：鈴木 杏／少路勇介／オクイシュージ／峯村リエ

松尾スズキ作品、初めて海を渡る「マシーン日記」パリ公演レポート

「濃密で、豊かで、可笑しくて、狂っている。さらに深く理解するために、もう一度みようと思う」
（パリ公演のアンケートより）

『マシーン日記』4月のパリ日本文化会館での本番は、舞台に登場した松尾スズキさんの「ボンソワール」というあいさつで始まりました。劇中にでてくる「仮装大賞」「ジャングル風呂」「鳥人間コンテスト」について、フランス人の観客に説明をするために、全編フランス語で前説を行ったのです。短い準備時間の中で猛特訓したフランス語による約5分のスピーチで、松尾さんがパリジャン、パリジェンヌのハートをがっちり掴んだ舞台の幕開けでした。

2013年3月に東京芸術劇場シアターイーストで幕を開けた『マシーン日記』は、4月の新潟、北九州公演を経て、最後に松尾スズキさんの作品初の海外公演としてパリへ向かいました。約20年前に書かれたこの芝居は、キャスト、演出、劇場も一新して、12年ぶりの再演です。

今回のパリ公演は、「是非パリで松尾さんの作品をやりましょう」というフランス側の提案からスタートしました。妥協せず、「日本と完全に同じものを観てもらう」ことにこだわりぬいた今回のパリ公演のために、日本国内で使われた物と寸分違わぬ舞台装置と小道具がパリに持ち込まれました。ツアースタッフも、北九州から乗り継ぎでパリへ直行し、そのまま仕込みに突入する強行スケジュールをこなして公演準備を行いました。

日本ツアーを経た『マシーン日記』。出演者の呼吸もぴったり、スタッフワークも万全の状態。とはいえはじめての海外公演で、台詞は字幕を通じて伝えられる。細かなニュアンスや文化の違いが伝わるのか、演出家も出演者たちも不安と緊張を抱えて本番にのぞみました。そんな心配をよそに、上演が始まると満席の観客はどんどん作品に引き込まれ、客席では、台詞のタイミングに合わせて、素直な笑いやどよめき、ときには悲鳴が起こりました。カーテンコールは大喝采。終演後のロビーでも、アンケートでも、演出・俳優・舞台美術のクオリティの高さに驚嘆の声があふれました。

「この家族が堕落の道を進むさまを、閉ざされた窓が覆い隠す。幸せな世界と恐怖の世界は、月光が照らす窓ひとつで分断されるに過ぎない。外の幸せな世界では彼らは「常識人」である。しかし室内では、何とか生き延びようとする家庭の悲劇的な現実が繰り広げられている。人間の恐ろしい一面が、現実と連結した漫画的なもののなかで、砂時計の砂が落ちるかのように暴露されていくのだ。」パリ公演直後に書かれたレビューからは、松尾スズキ作品の虜になった観客の興奮が伝わります。

遊び心と辛辣なユーモアにあふれる台詞、全力でぶつかりあう俳優たちの熱演、こぼれそうに大量の小道具、なにもかも過激で過剰なこの芝居の根底にある、言葉を越えた普遍的なテーマは、間違いなくパリの観客の胸にも届いていました。

文：「マシーン日記」制作担当